

「平和に悩み続けて」

沖縄県立糸満高等学校三年 長嶺 葵

私の住んでいる糸満市の学校では、平和学習というものがよく行われる。その学習の中で、よく問われる「平和な世界を築くために私たちができる事を考えてみよう」という質問に、私はいつも悩まされてしまう。

「平和な世界」とは何なんだろう。人間同士の争いが無い世界が平和なのだろうか。貧困問題が解決された世界が平和なのだろうか。何故、平和を求めるのだろうか。と、私は、いつも悩んでしまう。その度に「沖縄戦を後世に伝えていく」や「政治に関心を持つ」と書き提出を繰り返してきた。このような、回答も間違っではないのだろうか。だが、私にはどれもじっくり落ちてくる回答ではなかった。

私は、小学生の頃から歴史に興味があった。図書室で沖縄の歴史書をペラペラとめくり、偉人の功績に目を光らせて読んでいた。どの歴史書にも、大々的に沖縄戦について書かれており、そのような本を読む度に私は、遠い歴史の一部だと感じ、どこか他人事だった。

それから成長し、私は高校生となった。私の通う糸満高校では、2年生の平和学習で「平和ウォークラリー」という行事がある。その行事は、糸満高校から出発し、数々の戦跡を巡り、平和祈念公園まで歩き、戦時中の人々の気持ちを感じるという学習であった。六月の強い日差しが照りつける中、私たちは糸満高校から出発した。糸満高校から平和祈念公園までの十キロ余の道は、初めは足取りも軽かったが、水が少なくなり、灼熱の中で長い坂道を登っていかなくではならなかった。この状況は、とても辛かったことを鮮明に覚えている。紫外線予防の服と帽子、歩きやすい靴、補充可能な水がある中で、私や友達の言葉数は、少なくなっていた。

何故、こんな事をしなければならないのかと苛立ち考えたとき、私は思い出した。七十五年前は実際に多くの人々が逃げ惑った道なのだと。私たちのような、安全が確保されている状況でも無ければ、服や靴も粗末なもの、水も食料もない、そのような状況の中で生きた人々がいることを思い出した。

そして、過酷な道を歩き切った先の平和祈念公園は、いつもとは全く別の場所のように見えた。多くの生徒が広場で休んでいる中、私は、海へと目を向けた。そして、考えた。七十五年前の人々にとって、この海は「絶望」だったのか「希望」だったのだろうかと考えた。

当時、摩文仁の丘では、地平線上には、米軍の艦隊が連なり、後ろからは陸軍が追っていた状況下の中、人々は何を思ったのだろうか。

私の身近な沖縄戦体験に祖父がいる。私の祖父は当時十三歳の時に沖縄戦を体験している。少し厳しい人であるが、祖母と仲の良かった優しい人だ。そんな祖父へ沖縄戦について尋ねたことがある。しかし、祖父は何も答えてくれなかった。さっきまで、楽しくお喋りをしていたのに、黙り込み何も口には出してくれなかった。そんな、祖父の暗い雰囲気を感じ、私は何も聞くことが出来なかった。

この出来事を、海を眺めながら思い出した。祖父は、どちらの感情を持ったのだろうか。この地にたどり着き、自ら命を絶っていく人々を見て、生き残ることを決めたのだろうか。答えはわからなかったが、祖父が生き残ると決めてくれたお陰で、私は今、この地で生きていることを感じた。

平和ウォークラリーのしおりの最後にも、いつもと同じような問いがあった。私はまた悩んだ。しかし、今回は、振り返った。今日の平和ウォークラリーで感じたことや祖父との出来事、これまでの平和学習から学んだこと、と多くのことを振り返って悩んだ。そして、私は、一つの答えに辿り着いた。

平和な世界を築いていくためには、「平和について悩み、考える。そして、一人ひとりの考えを持つこと。」

私は、平和な世界というのは、時代や環境、価値観によって多变的に成り立っているものだと思える。これらに、一つの正確などなく、不正確もない。私たちが、平和な世界を求め続ける限り、この問いへぶつかり、立ち止まってしまふ。しかし、考えを辞め、誰かの回答に従ってはいけないと思う。自分自身の中で、平和について考え悩み続けることが、平和な世界への道なのではないだろうか。

最後に私は、平和な世界を求め続け、今日も平和に悩み続ける。